

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2013年12月7日
文責：JUN

公開研究会が生み出すもの

毎年、11月は一年でもっともハードな月です。わたしの学校訪問の日程がもっともきつということと、そのほとんどの学校が公開研究会を実施することによります。

公開研究会は研究発表会ではありません。研究発表会は発表が目的です。発表というと、ピアノの発表会などを思い起こせばわかることですが、なにがしかの成果が求められます。これまで行われてきた研究発表会は、その地域の教育委員会に指定されて行うものがほとんどでした。しかもその指定は、2年とか3年とかいった短期間のものです。指定されて行う研究で、発表するため短期間で成果を出さなければいけません。そして指定が外れればいつの間にか消滅する危険性をはらんでいます。研究発表会にはこういう背景があります。

公開研究会は、公開が目的です。公開とは「公衆に開放すること」(岩波国語辞典)ですが、いったい何を開放するのでしょうか。それは読んで字のごとく「研究」を開放するのです。その学校の研究のすがたを、発表するのではなく開放するのです。開放とはありのままの状況を開き放つという意味ですから、立派な？結果を特別仕立てで発表するのではないということになります。

その学校の研究の姿はどこに表れるでしょうか。当然、学校教育の中心である授業に表れます。そして、学ぶ子どものすがたに表れます。さらに、子どもに対応する教師のすがたに表れます。校舎内の学びの環境づくりにも表れます。そして、わたしがいつも力説する、教師たちによる研究協議会にも色濃く表れます。そのすべてを開放するのが「公開研究会」なのです。

こういう考えで実施する公開研究会によって、いま、日本国中いたるところで素晴らしい状況が生まれています。それは、研究発表会ではない公開研究会だからこそ生まれる素晴らしいさだと言えます。それはいったいどういうものなのでしょう。わたしがこの11月に参加した学校を例に考えてみることにします。

1 教師が育つ

H校の公開研究会で、研究協議の対象となる中心授業をしたのはまだ2年目のTさんでした。H校を訪問するようになって3年目ですから、当然、Tさんの授業は彼女の1年目から見えています。教師になったばかりの人ならだれでもそうであるように、授業をすることに懸命で子どもの状況が見えていないという傾向がありました。数人の子どもが、Tさんが何か

を問うとすぐ答えてしまうのですが、余裕のないTさんはその子どものことばで授業を進めていました。つまり授業がその場その場の場当たりのなものになっていたのです。そんなTさんにわたしは、Tさんには見えていない子どもの事実を示して、「子どもはこうだったよ、もっと子どものことを見よう」と言い続けてきたのでした。

その一方、Tさんの持つ雰囲気、教師としての資質を感じていました。いつもやわらかくにこやかな表情なのです。おっとりしているのですが、あくせくしないからかどこかどっしり構えているような感じもします。子どもにかけることばもくつきりしています。ですから、いつ教室に行っても、子どもが明るく意欲的なのです。この人はきっとよい教師になる、そう思ったものでした。

そのTさんが公開研における中心授業の授業者になったのです。当然、その学校の何人もの教師が彼女の授業づくりを支えました。何度も教室に足を運び、さまざまなアドバイスをしたようです。教材研究にもつき合っていたでしょうし、教材研究のためのフィールドワークに同行してくれた人もいたということです。

公開研究会当日の彼女の授業は、とても2年目とは思えないほど堂々としたものでした。ゆったりとにこやかに子どものことばを受け取る表情、グループを入れるタイミングの取り方など、ほうっとため息がでるほど堂にいていました。いつの間にこんなことができるようになったのだろう、わたしはただ感嘆するしかありませんでした。

A校にも2年目の教師がいました。Bさんという男性教師です。彼は目立つ行動をとる人ではありません。わたしが訪問したときの彼の言動はいつも控えめなものでした。

教師がどういう人柄なのかということは教室に行けば大体の察しがつきます。毎日指導を受けている子どもたちのすがたに担任教師の人柄が反映されるからです。Aさんの学級は、気軽に話せる、おだやかでのんびりした雰囲気に包まれていました。子どもたちにとって、その教室はきっと居心地がよいものだろうと思われました。それは、そのままAさん自身の人柄なのだとなわたしは思っていました。

ただ授業者としては、どうしてもやることが「アバウト」になるという問題がありました。ほんわかとしていて楽しく学んでいるのだけれど、きりっと引き締まる集中の瞬間が生まれず、いつも「もうちょっとなんだけどなあ」というところで留まってしまうのです。それが子どもの学びをあと一步深められない原因になっていたのです。

そのBさんが、公開研究会でなんとも頼もしい授業をしたのです。「アバウトさ」が影を潜め、子どもたちの学びがかなりの深まりを見せていたからです。研究会に来ていたその市の指導主事がしみじみとした口調で「Aさん、成長したなあ」と言っていました、まさにそのことば通りでした。

この二人の教師は、確実に公開研究会によって成長できたのです。このことに両校の教師たちの異論はまったくないと思います。公開研究会という目標があることで、2人の内のある扉が開かれ、その中にある可能性が本人の意識以上に生まれ出てきたのです。公開研究会は、それを可能にする力を持っています。それは、ここに紹介した2人だけのことではありません。きっと何人もの人が、わたしもそうでしたと言ってくれるにちがいありません。

2 同僚性が深まる

公開研究会に向けた取り組みは、その日が近づいてきてからにわかに行うものではありません。それは、前述したように「ありのままの様子を開放する」のが公開研だからです。しかし、その「ありのまま」を少しでも充実したものにしたいという思いは当然のように生まれます。そこに爆発的なものを生み出すエネルギーがあります。

H校の公開研究会において、わたしとともに外部協力者として来ていたSさんはこの日の授業の事実にかく感動していました。そのSさんが、「2か月前に訪問した際にはここまでの状態ではなかったの、公開研になればどうなるだろうと思っていた」とおっしゃったのです。Sさんは、この言葉で、その2か月間にどれだけ充実した取り組みが行われたか、それがどれだけの力を一人ひとりの教師に与えたかに感動したという思いを示されたのです。

H校のある教師が次のようなことをわたしに語ってくれました。

「先生たちの努力、つながり、追いつけはすごいものがありました。職員室のあちこちから授業や教材の話が聞こえたり、学年を越えて『授業見に来て』『次の時間、見に行ってもいい?』という声が聞こえたり……。夜の会で石井先生が言われた『これが公開の力なんです』という言葉、ものすごく心に落ちました」

実は、公開研究会の挨拶で校長先生も同じことをおっしゃいました。校長として、公開研を目指して支え合い、学び合う教師たちの姿がうれしくてならなかったのでしょうか。自校の教師たちがこんなにつながり合って「一つのこと」を目指してくれる、そこに素晴らしい同僚性が生まれている、それはまさに校長冥利に尽きるという思いではなかったのでしょうか。かつて校長だったわたしには、H校の校長のその喜びは沁み入るようにわかります。

3 学びが深まり、子どもが育つ

公開研究会は教師を育て、教師の同僚性を深めると述べましたが、それ以上に大切なことがあります。それは、学びが深まり、子どもが育つということです。

わたしは、公開研究会になると、子どもが普段以上の意欲と学びを生み出すことを信じています。そして、それを契機に子どもたちの学ぶすがたが一段ステップアップすると考えています。その期待と確信が裏切られることはほとんどありません。それはなぜでしょうか。

一つには、日々、子どもたちが教師の取り組むすがたを見ているからです。授業づくりに熱心に取り組むということは、自分たちのことをしっかり見て努力しているということです。その意気込みと情熱を肌で感じているのです。ましてや、公開研当日の授業が、教師と子ども双方の目標となったとしたら、子どもの心に火が点かないはずがありません。

今年の公開研究会でわたしが目にした子どもたちのすがたは本当に素敵でした。そうなるとうわかっていたわたしは、いつもは持たないカメラを携帯していました。そして、わたしの目が釘付けになった子どもの表情・すがた、心奪われた子どものつながりを次々と収めていきました。そして、その写真を、研究協議会の後の講演で参加者の皆さんに見ていただいた

のでした。この写真についてある学校の教師が次のようなことを語ってくれました。

「石井先生が各教室3分という短い時間の中で、あんなに多くの素敵な子どもたちの関わりを見つけてくださってうれしくなったし、ああいう姿を目指そうと思いました。そして、自分たちが授業を見せてもらった時に、何を見ていくのかを教えてもらったと思いました」

授業をしている教師がすべての子どものすがたをとらえることは難しいことです。ましてや研究会においては普段以上に夢中になっているのです。けれども、そのとき子どもは、それぞれに意欲を燃やし、それぞれの学びを実行しているのです。授業は、そういう一人ひとりの学びの事実を少しでも豊かにとらえることで豊かになります。子どもはこんなに素敵だったよと示すこと、それは、公開研における子どもの育ちを確認するとともに、教師たちの目線を確認なものにすることになるのだと思ってわたしは写真を見てもらったのです。

本年度の公開研究会において、わたしがかわるほとんどの学校が「ジャンプの学び」に取り組みました。すべての秋の研究会を終えたいま、そのことの意味は計り知れないと思っています。「ジャンプの学び」は、すべての子どもの学びの保障という「平等性」、学びの質の保障という「深まり」、この二つをともに実現するうえでなんとしても取り組まなければならないことです。

どの学校でも、何を課題にするかで大変悩んだようです。それは、一人の教師の自分だけの取り組みでは達成できないことでした。ですからH校でもA校でもK校でも、何人もの教師が寄り合って考え合ったということです。そのことがまず、その協議に加わったすべての教師の教材観を深め、そしてそれはそれぞれの授業の「深まり」につながっていきました。

そして、特筆すべきは、「ジャンプの課題」に取り組んだすべての授業において、子どもが夢中になって取り組んだということです。そこでは学力の差を超えたかわりが生まれていました。こうして、佐藤学先生が何年も前からおっしゃっておられたことはその通りだったのだと腑に落ちたのでした。

「ジャンプの学び」への取り組みは、これまでの学習指導案づくりの概念を超えるものであるだけに、到底一人だけでは挑戦できません。それだけに、すべての教師で取り組む公開研究会が絶好の挑戦の場になるのです。

4 保護者の信頼が生まれる

ある学校の公開研究会で、校舎のあちこちに保護者のすがたがみられました。授業を参観しているのではないのです。たくさんの方の参観者の案内のために立ってくださったのです。11月ですから校舎の廊下はかなり冷えます。そこにずっと立って、参加者一人ひとりを温かい会釈で迎えてくださっていたのです。

研究会終了後、その保護者の一人が次のようなことを校長に話したということを聞いたとき、こういうことが起きるのだと本当にうれしくなりました。

「研究会が終わり帰っていく参加者から『すごくいい子どもたちですね』とか『感動しました。また来年も必ず来ます』と言っていただけてうれしかった。寒い中で頑張ってたよかったです」

自分の学校のことをこんなに評価してもらった、子どものことをこんなに褒めてもらった、それは、自分の子どもが通う学校を褒めてもらったということです。その学校に子どもを通わせている保護者にとってこれ以上誇らしいことはないでしょう。

そして、それは、公開研究会はもちろん、その日まで学校ぐるみ取り組んできた教師たちへの信頼になります。先生たちは、こんなに心を一つにして努力している、それが、何一つ説明したりしないでも保護者に伝わるのですから、公開研究会はたいへんな意味を有しているのです。

5 広域の「学びの共同体」が生まれる

H校の公開研究会は土曜日に行われました。そのため、同じ学校からたくさんの教師がこぞって参加するという現象が生まれました。それは、どういう意味を持っているのでしょうか。

わたしは、公開研究会には、学校づくり・授業づくりの取り組みを、その学校だけに留めないで広域化し、広げていく意味があると前々から考えていました。

わたしのかわる学校はすべて「学び合う学び」「学びの共同体づくり」に取り組む学校です。それらの学校では、教師たちの互いの行き来が頻繁に行われています。同じ方向で取り組む学校に行くことで、刺激を受け、学んできているのです。11月の公開研への参加者の多くがそういう学校からの参加であつたらうことは容易に想像できます。

昨年度取り組みを始めた学校がありました。わたしはその学校の校長に、本年度中にすべての教師を近くのわたしの関係校に行かせるようお願いしました。とにかく、そのように取り組んでいる学校に身を置き、子どもや授業を自分の目で見て、肌で感じ取ってくることからしか何事も始まらないと考えたからです。本年度、その学校は明確な歩みを始めました。こんなに短い期間でここまでと思うほどの授業の変わりようです。

そういうことからすると、ほとんどの教師が一つの学校の公開研究会にそろって参加したH校公開研で起きた事例の持つ意味は計り知れないだろうと思われまふ。みんなが共通の体験をしたのですから。

公開研究会は、同じように取り組む学校と学校をつなぎます。一つの学校が立ち上がると、その公開研に参加した別の学校でも立ち上がり、その学校が公開研を開けば、また別の学校に波及していく、つまりそういう連鎖を生み出す「連結」の場なのです。わたしたちの取り組みは、授業を「学び合う学び」にし、学級・学校を「学びの共同体」にしていくことを目指しています。そういうことからすると、公開研究会によって、学校を超えた広域の「学びの共同体」をつくり出せると考えてよいのではないのでしょうか。

どんな仕事でもそうですが、自らのありようを外に開かずして、他者とつながり、他者から学ぼうとせずして、その深まりはあり得ません。授業のうまい下手ではなく、ありのままを開放して、学びと学校の深まりを目指す「公開研究会」の意義を、今こそ多くの人と共有したいものです。